

プロローグ…禁じられた検分の果て

石造りの地下室、通称「聖域」には、外界の喧騒も、冬の冷たい空気さえも届かない。そこに停滞しているのは、男たちの荒い吐息と、私の尊厳が甘く溶かされていくような濃密な熱気、そして私が動くたびに「カシャリ」と鳴る銀の鎖の音だけだった。

「あ……あ、あああっ！♡ もう、だめ……壊れちゃう……っ♡」

私の震える声が、高い天井に反響しては、惨めに消えていく。正面に置かれた巨大な全身鏡には、かつて「聖女」として崇められていた自分の、無惨に乱された姿が映し出されていた。

清廉な白を象徴していたはずの聖女の法衣は、今や見る影もなく剥だけ、あらわになった肌は男たちの熱い指先によって、まるで熟した果実のように赤く火照っている。

手首を繋ぐ銀の鎖は、私が快楽に耐えかねて身悶えするたびに、冷酷な音を立て

て私の「所有権」が誰にあるのかを主張していた。

「壊れる？ いえ、聖女様。これは貴女を救うための『検分』ですよ。魔力が暴走し、その身を灼く前に、私たちが正しく抜き取って差し上げねばならないのですから」

背後から私を抱きしめるように固定しているのは、騎士団長ディートリヒだ。彼は完璧に整った軍服の袖を捲り、手袋を脱ぎ捨てた白く長い指先で、私の鎖骨のラインをなぞり、ゆっくりと胸元へと這わせてくる。その指先の動きは、愛撫というにはあまりにも正確で、どこをどう触れれば私が最も甘い声を上げるのかを、すべて理解しているようだった。

「鏡をよく見てください。私の指が、貴女の清らかなはずの肌を快楽の色に染めていく様を。聖女ともあろうお方が、たったこれだけの刺激で、こんなに期待に満ちた顔をなさるなんて……」

ディートリヒ様の低く、理知的な声が鼓膜を揺らす。彼は決して声を荒らげな

い。懃懃無礼な敬語を崩さないまま、私の羞恥心を丁寧にかつ確実に快感へと変換していく。

「や……っ、んんっ♡ そんな言い方……っ♡ ああっ、ひゃああっ！♡」

ディートリヒ様の指が、最も敏感な場所を優しく、けれど執拗に捉えた瞬間、私の背筋に激しい火花が散った。

みなど微塵もない。ただ、内側から溢れ出す熱い愛液が、彼の指を濡らし、私の理性をじわじわと削り取っていく。

「おやおや、声が漏れていますよ、聖女様。私の指が、そんなに奥まで『浄化』してほしいと、身体が震えているようですね。これほど熱く私を迎え入れるとは、やはり貴女の魔力は、私たちの手でしか鎮められないようだ」

「ちが……っ、ああっ♡ んん……っ♡」

定する言葉は、すぐに甘い熱に溶かされていく。鏡の中に映る、快楽に溺れていく自分の瞳は、もう聖女のそれではない。私は、背後から与えられる冷徹で計算さ

れた愛撫に、抗うどころか自分から縋り付こうとしていることに絶望し、同時にこの上ない充足感を感じていた。だが、これはまだ、終わりのない「七日間」の、序奏に過ぎなかったのだ。

「はっ、団長。理屈が長えよ。この女、聖女の皮を剥いちまえば、俺たちの毒を欲しがって鳴くだけの雌じゃねえか」

後からディートリヒ様の冷徹な指先に弄ばれていた私の前に、乱暴な足音と共に、更なる熱い影が落ちた。副団長バラガン様だ。彼は戦場帰りのままのような、血と鉄の匂い、そして剥き出しの野性を纏わせたまま、私の膝を強引に割り、獲物を品定めするような猛獣の瞳で私を射抜いた。

「あ……っ、バラガン……様……っ♡」

「様なんてつけなくていいぜ。ほら、そんなに震えて……。団長に後ろから攻められて、前はこんなに寂しがってるじゃねえか」

バラガンの無骨で熱い掌が、私の内腿をなぞり、最も無防備な場所へと容赦なく

侵入してくる。ディートリヒ様の理知的な攻めとは対照的な、本能を剥き出しにした暴力的なまでの熱量。けれど、そこには痛みなど微塵もなかった。ただ、あまりにも強烈な「男」の質量が、私の身体を内側から作り変えていくような、恐ろしいほどの充足感だけがそこにあった。

「や……っ、んんっ♡ ひゃああっ！♡」

「いい声だ。あんたが俺を助けた時に見せた、あの高潔な顔……。それを快楽でグチャグチャに溶かしてやりたくて、俺は気が狂いそうだったんだ。ほら、俺の熱いので中まで焼き付けてやるよ……！」

バラガン様が私の腰を掴み、逃げ場を塞ぐように強引な愛撫を重ねる。前からはバラガン様の荒々しい熱情、後ろからはディートリヒ様の計算された冷徹な蹂躪。二人の騎士の間に挟まれ、私の意識は真っ白な快楽の深淵へと突き落とされる。

「あ……あ、ああああっ！♡ もっと……もっと、汚して……っ♡」

自ら乞うたその言葉が、最後の引き金だった。背中合わせの快感に脳が震え、私

はもう、自分がどこの誰なのかさえ分からなくなっていた。ディートリヒ様は私の耳元で、勝利を確信したような低い笑い声を漏らした。

「素晴らしい。これこそが、貴女が望んでいた『救済』の形なのです。聖女様」

一週間前まで、私はこの世界の希望を背負った聖女だった。けれど、外界との接触を絶たれたこの「空白の七日間」で、私は二人の騎士が分かち合い、貪り尽くすためだけの肉塊へと成り下がっていく。清廉だったはずの心は、二人が注ぎ込む歪んだ愛情の泥沼に、もう二度と浮き上がれないほど深く、甘く、沈み込んでいった。

「あ……あつ、んん……っ♡ あああっ！♡」

二つの熱に挟まれ、逃げ場を完全に失った私は、背中を大きく反らせて絶頂の波に呑み込まれた。視界は火花が散ったように白く染まり、耳の奥では自分の激しい呼吸と、銀の鎖が激しく揺れる音だけが鳴り響いている。ディートリヒ様の指が奥深くの最も敏感な一点を執拗に突き、同時にバラガン様が私の身体を壊すような勢

いで揺さぶる。その連動した刺激は、人間の理性が耐えられる限界を容易く超えていた。

「ふう……。一度の絶頂でこれほどまで脱力するとは。やはり魔力の飽和状態は深刻ですね」

ディートリヒ様が私の肩に顔を埋め、首筋の柔らかな肌を甘く食む。彼の冷たかった吐息は、今や私を溶解させるほどの熱を帯びている。一方、バラガン様は私の腰をしっかりと固定したまま、私の顔に溜まった涙を指先で乱暴に拭った。

「おい、まだ終わらせねえぞ。あんたが俺たちを救ったんだ。だったら、俺たちが満足するまで、何度でもその高いプライドを俺たちの熱で溶かしてもらおう」

私は、力なく垂れ下がった腕の先で、カシヤリと音を立てる鎖を見つめていた。かつて人々を癒やすために使っていた私の魔力は、今やこの二人の騎士を繋ぎ止めるための蜜へと変わり果てている。

「……………っ、んん……………っ♡　もう……………戻れないの……………？♡」

「戻る必要などありません」

ディートリヒ様が断言するように私の耳を噛む。

「ここは貴女のための聖域。そして私たちは、貴女を守るためだけの獣。……さ

あ、次の検分を始めましょうか」

二人の男の視線が、再び私の身体を侵食し始める。その瞳に宿っているのは、騎士としての忠誠心などではなく、一人の女を永遠に支配し続けようとする暗い執着心だけだった。絶望的な快樂の予感に、私の身体は、自分の意志とは無関係にまた熱く疼き始めていた。

第一章：邂逅と「救済」の代償

すべてが始まったのは、あの日、私がこの異世界に「聖女」として召喚された直後の戦場だった。現代日本で普通のOLとして平穩に暮らしていた私は、ある日突然、眩い光に包まれて見知らぬ大地に立っていた。鼻を突く鉄錆の匂い、空を覆う黒煙、そして地響きのような爆音。

「聖女様、危険です！ 下がってください！」

誰かの叫び声と共に、私の目の前に現れたのは、巨大な魔物の死骸と、それを仕留めながらも限界を迎えつつある騎士たちの姿だった。

その中心に立っていたのが、鋼の規律を体現したかのような冷徹な騎士団長ディートリヒ様と、全身に返り血を浴びて戦鬼のごとく戦う副団長バラガン様だった。魔物が死に際に放った「死の呪い」は、目に見える毒となって二人の身体を蝕んでいた。彼らの白い肌は不気味な黒斑に覆われ、呼吸をするたびに肺が灼けるような苦悶に顔を歪めている。

助けなきゃ……私が、何とかしなきゃ！

恐怖よりも先に、得体の知れない使命感が突き上げてきた。私は二人のもとへ駆け寄り、その傷口に震える手を重ねた。その手が、見慣れた自分のモノでないことに気づいたが、今はそれどころではない。それが、自分の命——「魔力」を激しく削り、精神を磨り潰す禁忌の力、「浄化」であることも知らずに。

「——光よ、彼らの呪いを、私に」

私の祈りに応えるように、手のひらから白銀の光が溢れ出した。その光は二人の呪いを吸い上げ、代わりに私の血管を氷の粒が流れるような激痛が走る。

「な……んだ、この温かさは……。凍りついていた感覚が……」

感情を殺し、死を受け入れていたディートリヒ様の瞳に、初めて人間らしい動揺が走った。

溢れ出した白銀の光は、私の手のひらを通じて、死に瀕していた二人の騎士へと流れ込んでいった。それは温かく、けれど私の内側を鋭く削り取るような、激しい

魔力の奔流だった。

「ああ……っ、はぁ……っ」

あまりの魔力の消耗に、膝の力が抜けそうになる。けれど、目の前で苦しむ二人を放り出すことなんて、私には到底できなかった。私の視界が白く染まる中、最初に呪いから解放されたのは、騎士団長デイトリヒ様だった。

「……これは、一体……」

彼の肌を覆っていた不気味な黒斑が、私の光に触れた端から霧散していく。氷の彫刻のように整った彼の顔に、驚愕の色が走るのを私は見た。彼は「守護の道具」として生きること己に課し、感情という不要な重荷をすべて捨て去った男だったはずだ。

——ずっと、彼の「設定」が頭に流れ込んでくる。

私の浄化が彼の魂の最深部に触れた瞬間、何十年も閉ざされていた彼の心の扉が、音を立てて崩れ去った。

「温かい……。凍りついていた私の内側が、貴女の熱で……。溶かされていく……」
ディートリヒ様は、自分の胸元に置かれた私の手を、壊れ物を扱うような手つきで包み込んだ。

彼の瞳に宿っていたのは、救済への感謝などという生易しいものではない。それは、砂漠で唯一の泉を見つけた旅人のような、渴望に満ちた執着の光だった。

一方で、副団長バラガン様は咆哮を上げた。

「おい……。っ！ 何をしやがった……。俺の、俺の中が……。っ！」

戦場という弱肉強食の世界でしか己を定義できなかった彼にとって、女に救われるという事態は、魂を根底から否定されるに等しい屈辱だったはずだ。しかし、私の浄化の光が彼の荒々しい魔力と混ざり合った瞬間、彼の中の「敗北感」は、抗いようのない「征服欲」へと塗り替えられていった。

「女に……。こんな、柔な身体をした女に守られたってのか、俺は……。くそっ、この感覚……。頭がどうにかなりそうだぜ……。！」

彼は荒い息を吐きながら、自身の心臓を鷲掴みにするように胸元を掻きむしった。彼の中で、魔物の毒は死の呪いではなく、私の魔力を際限なく欲しがる、飢えた情欲へと変質していた。

二人の騎士に挟まれ、魔力を使い果たした私は、その場に崩れ落ちた。

「あ……ああ……っ」

身体が熱い。浄化の代償として、私の体内にも彼らから逆流した「毒」がわずかに流れ込んでいた。それは、ただの痛みではない。私の身体の奥底を、甘く痺れさせるような、未知の感覚。やっぱりここは、あの『背徳の聖女く騎士団の器く』の世界？ 私は、やたらとバッドエンドが多いあの聖女になっちゃたの？

「聖女様……。貴女が私たちを救ったのです。ですから、今度は私たちが、貴女を『守る』番だ」

ディートリヒ様が様私の肩を抱き寄せ、耳元で冷たく、けれど熱を帯びた声で囁いた。

「……逃がさねえぞ。あんたが俺の魂に触れたんだ。責任は、きっちり取ってもらうからな」

バラガン様が私の足元に膝をつき、獲物を確認するようなギラついた瞳で私を凝視した。

戦場に沈む夕日は、血のように赤く、二人の騎士の影を長く伸ばしていた。彼らの腕に抱かれながら、私は得体の知れない不安に震えていた。私が救ったはずの騎士たちは、もうどこにもいない。そこにいるのは、私の光に当てられ、私という存在なしでは生きられない身体に変えられてしまった、二頭の飢えた獣だったのだ。

違う。なにこれ……ディートリヒ・フォン・エーベルバッハ。魔導騎士団長。感情を捨て、己を『守護の道具』と定義する鉄面皮。設定では、聖女の純粋な犠牲に触れた時だけ、初めてその心を開くはず……。

そして、バラガン・ガルシア。副団長。弱肉強食しか信じてない野獣。女は守るものではなく、奪うものという設定。彼が救われるのは、自分を上回る『力』に屈服

した時だけ……彼は敗北して『人間性』を取り戻すんじゃないかったの？　なんて歪んだ征服欲……。

戦場から王都へと向かう豪華な馬車の中、私はかつてない「熱」に浮かされていた。魔力を使い果たした疲労だけではない。浄化の際、二人の騎士から逆流してきた「変質した魔物の毒」が、私の身体の奥底で疼き続けているのだ。

「はぁ……っ、あ……っ♡」

馬車が揺れるたび、肌と法衣が擦れるだけで、背筋を突き抜けるような甘い痺れが走る。こんな設定は知らない。聖女の回復は、自らの魔力と引き換えにするから、痛みを

伴うはず。こんな刺激知らない……。

向かい側に座る騎士団長ディートリヒ様と、私の隣で獣のような視線を隠そうともしない副団長バラガン様。二人の存在そのものが、今の私には猛毒のように刺激

的だった。

「聖女様、顔色が優れませんね。魔力の循環が滞っている証拠です。王都へ着く前に、私が少し『調整』を施しましょう」

ディートリヒ様が静かに立ち上がり、私の隣へと移動してきた。馬車のカーテンが閉められ、狭い車内は一気に密室へと変わる。

「ディートリヒ、様……っ。あ、だめ……っ♡」

彼の長い指が私のうなじに触れた瞬間、私は抗う力もなく声を漏らした。ディートリヒ様は冷徹な表情のまま、私の法衣の襟元をくつろげ、あらわになった白い鎖骨に唇を寄せた。

「だめではありません。これは騎士団長としての正当な職務……貴女という国の至宝を守るための、不可欠な処置なのです」

彼の舌が熱く、湿った感触で私の肌をなぞる。氷のような冷徹さを誇る彼が、私に触れる時だけは、内側に秘めた狂おしいほどの熱を漏らしていた。

「団長、一人で独占するのは感心しねえな。俺の浄化も必要だろ？」

バラガン様がニヤリと口角を上げ、私の反対側から手を伸ばしてきた。彼の大きな掌が、私の細い太ももを掴み、スカートの奥へと滑り込んでくる。

「ひゃ……ああっ！♡ バラガン、様……っ、そんなところ……っ♡」

「あんたを助けた時から、ずっと考えてたんだ。この清らかな肌が、俺の手で赤く染まる瞬間をな。ほら、そんなに震えるなよ。気持ちよくしてやるから」

バラガン様の熱い指先が、最も敏感な場所に触れそうになる。ディートリヒ様の理性的な愛撫と、バラガンの本能的な蹂躪。二つの異なる熱情に挟まれ、私の頭の中は真っ白に塗り潰されていく。

「見てください、聖女様。貴女の身体は、こんなにも私たちを求めている。これが、貴女が私たちに与えた『救済』の結末なのですよ」

ディートリヒ様が耳元で甘く囁き、私の蕾の先を指先で弾く。

「あ……あ、ああああっ！♡ んんっ……ふあ……っ♡」

痛みなどどこにもない。ただ、延々と続く甘美な拷問のような快樂が、私の聖女としての誇りを、一滴ずつ愛液へと変えて零れさせていく。王都へ着く頃には、私はもう、自分の足で立つことさえ危ういほどに、二人の男の熱にあてられていた。

しかし、凱旋した私たちを待ち受けていたのは、歓迎の宴だけではなかった。

王宮の廊下を歩きながら、私は聖女としての鋭敏な感覚——あるいは「この世界の知識」から、背後に漂う醜悪な大人たちの陰謀を察知していた。

……間違いない。ゲームの通りなら、王宮の連中は私を隣国の老王へ売り払おうとしている。私が生き残るための『生存フラグ』は、ここで二人に守ってもらうことだけど……。

馬車を降りた直後、ふと背後の空気が凍りついたのを感じて、私は足を止めた。少し後ろを歩いていたディートリヒ様とバラガン様が、声を潜めて密談している。その低い、けれど怒りに震える声が、私の耳に届いてしまった。

「……ディートリヒ、聞こえたか。あの豚ども、彼女を隣国の色好みな老王に差し出すつもりだぜ」

バラガン様の吐き捨てるような声。その響きには、王宮への義憤よりも、もっと暗くどろりとした「執着」が混じっている。

「……承知しています。彼女を救えるのは、真に愛し、守る力を持つ我々だけだ。バラガン、覚悟はできていますね」

ディートリヒ様の返答は、凍てつくほどに冷静で……そして狂っていた。

彼が「守る」と言った時、私の背筋に冷たい戦慄が走った。それは純粹な騎士の言葉ではなく、略奪者の宣言だったから。

「ああ。騎士の誓いなんて、彼女に魂を焼かれた時に捨てた。……あいつを鎖で繋いで、俺たちだけのものにする。それ以外、何もいらねえ」

月明かりの下、二人が無言で視線を交わすのを、私は震えながら見つめることしかできなかった。

……ああ、やっぱり。彼らの『救済』は、もう最初から歪んでいるんだ。私を救うという名目のもとに、私を永遠に快樂の檻へと閉じ込める……。

その背徳的な結託の気配に、私の身体は恐怖と、そして逃れられない甘い痺れに震えていた。

王宮の夜は、不気味なほどに静まり返っていた。窓の外に見える月は、まるで私たちの運命を嘲笑うかのように赤く、不吉な輝きを放っている。私は豪華な客室のベッドの上で、昼間に感じたあの「熱」に耐えていた。二人の騎士に触れられた場所が、いまだに火を噴くように熱い。身体の奥が疼き、自分でも気づかないうちにシーツを握りしめていた。

どうして……。私はただ、彼らを救いたかっただけなのに……。

その時、音もなく扉が開かれた。

入ってきたのは、甲冑を脱ぎ捨て、漆黒の軍装に身を包んだディートリヒとバラ

ガンだった。

「聖女様、お目覚めですか。夜分に失礼いたします」

ディートリヒ様の声は、いつにも増して冷たく、有無を言わせぬ響きを帯びている。彼の背後で、バラガンがギラついた瞳で私を凝視し、重い扉の門を下ろした。

「……ディートリヒ様？　バラガン様……？　こんな夜更けに、一体……」

「貴女を連れ出しに来ました。この腐り果てた王宮から、我々だけが貴女を守れる場所へ」

ディートリヒ様がベッドに近づき、私の震える肩を抱き寄せた。

「待ってください！　連れ出すって、どこへ……っ」

抗おうとした私の唇を、ディートリヒの冷たい指先が塞いだ。

「貴女を隣国の老王に売り渡そうとする豚たちの声が、私には聞こえる。そんなことは、万死に値する。貴女のその清らかな肌も、甘い吐息も、我々二人だけが分かち合ふべきものだ」

「あんたは黙って守られてりゃいいんだよ」

バラガン様が私の足首を掴み、強引に引き寄せた。彼は私の足の甲に熱い口づけを落とし、そのまま太もの内側へと舌を這わせる。

「ひゃ……あぁっ！♡ そんな……だめ、ですよ……っ♡」

「だめではありません。これは貴女を救うための、不可避な『保護』なのです。さあ、行きましょう」

ディートリヒが私を横抱きにし、隠し通路を通って地下深くへと進んでいく。辿り着いたのは、騎士団の地下深くに隠された、石造りの密室だった。中央には豪華な椅子と、それを囲むように配置された巨大な鏡。壁には魔力を遮断する特殊な術式が刻まれ、外界との繋がりには完全に断たれている。

「ここが……私の、居場所……？」

「ええ。今日から七日間、貴女はここで我々二人による『浄化』を受けるのです。魔力が安定し、貴女の身体が我々の熱に完全に馴染むまで……。一步も外へ出すつ

もりはありません」

ディートリヒ様が私を椅子に座らせると、手首に細い銀の鎖を繋いだ。痛みはない。けれど、ひんやりとした金属の感触が、私がもう逃げられないことを冷酷に告げていた。

「……っ、んんっ♡ 熱い……身体が、変な感じ……っ♡」

「それは貴女の中の魔力が、俺たちを求めて暴れてる証拠だ。なあ、団長。まずはこいつを『安定』させてやらないとな？」

バラガン様が私の法衣を乱暴に、けれどどこか愛おしむように引き裂いた。あらわになった私の白い肌が、地下室の冷たい空気と、二人の男の熱い視線に晒される。

「ああ……っ、やだ……っ♡ そんなに見ないで……っ♡」

鏡の中に映る自分の姿は、あまりにも無防備で、屈辱的だった。けれど、二人の騎士の手が同時に私の肌に触れた瞬間、羞恥心は一瞬で甘美な快樂へと書き換えら

れていく。

「さあ、聖女様。七日間の『検分』、その第一歩を始めましょうか。貴女がどれほど欲深い女か、その身に刻み込んで差し上げます」

ディートリヒ様が後ろから私の胸を包み込み、バラガン様が前から私の膝を割り、顔を近づけてくる。二人の騎士に挟まれ、逃げ場を失った私の身体は、期待と熱情に震えながら、深い墮落の深淵へと足を踏み入れた。